

〔崇高なる山水—中国・朝鮮、李郭系山水画の系譜一展によせて〕

## 日本人と郭熙山水

郭熙は北宋時代を代表し、また中国絵画史の中でも最も影響力のあった画家の一人です。河南省河陽温県に生まれ、熙寧年間(1068~1077)北宋の都であった開封に上り、当時王安石とともに改革の志に燃えていた若き神宗(挿図4)の寵愛を受けて活躍します。それでは日本人と郭熙はどのように関わるのでしょうか。従来まで郭熙など北宋系山水の影響は日本絵画には非常に少ないとされてきました。なるほど日本人は牧谿など南宋絵画を偏愛し、多くの名品が伝わることは周知の事実です。それではなぜ北宋の山水が伝わらなかったのか、今まで漠然と日本人の好み、と説明されてきたこの問題には、実は我々の美的趣向を形成するものが何であったのかというもう一つの重要な問いが潜んでいるようです。

実は郭熙と同じ開封宮廷の空気を吸った日本人がいます。成尋(1011-1081、挿図3)です。成尋は藤原頼通などの支援を受けて北宋に渡り、平安期の貴族にとって憧れの聖地であった天台山、五台山などを彼らに代わって巡礼します。一方折からの早魃で苦しんでいた時の北宋皇帝・神宗は、この異国から来た僧侶に

は不思議な力があると考えたようで、熙寧六年(1073)三月一日、成尋を宮廷に呼んで祈雨を行うことを命じます。成尋は宮城後苑大池(挿図2)にあった瑤津亭に壇を築き、見事三日後に雨を降らせました(『參天台五台山記』巻七)。焼香に訪れた神宗を迎え、成尋はさぞ晴れやかな気持ちだったことでしょう。中国では早魃は天が皇帝の行う政治(ここでは神宗の改革)を罰したものと考えられていましたから、一番喜んだのは神宗自身であったかも知れません。その証拠に成尋はその後、後苑にあった宮中文庫・太清樓などを案内されるという破格の待遇を受けるのです。成尋は当時北宋宮城の最も奥まで分け入ることのできた日本人だったと言えるでしょう。

成尋が開封で活躍していた頃、もう一人の天才が開封に現れました。河北省温県から上京してきた郭熙です。郭熙は代表作『早春図』(挿図1、台北・故宮博物院)を熙寧五年(1072)に描き、この後元豊六年(1083)の翰林学士院壁画を頂点として、神宗改革によって再編された宮中殿閣の壁画を一手に制作していきます。この過程で郭熙は成尋が祈雨を行った瑤津亭にも壁

画を描いています(『林泉高致集』画記)。成尋がこの画を見たかという少し時間が早いようですが、熙寧五年に入宋した成尋は郭熙の壁画があった大相国寺など開封の大寺院も訪問し、その後元豊4年(1081)帰国せずに開封で亡くなりますから、当時開封で大活躍もてはやされた郭熙の山水を初めて目にした日本人は成尋だった可能性はあるでしょう。

その一方で北宋は、熙寧七年(1074)頃、高麗から朝貢の使節・金良鑑に郭熙画を下賜します。しかし成尋に郭熙画が下賜されることはありませんでした。成尋はあくまで巡礼僧であり国家を代表する使節ではなく、また郭熙画には北宋が作り上げた重要な文化資源として国家を代表する意義を潜ませていたからです。その後朝鮮半島では李郭派風山水が大流行しますが、ここには郭熙画とは何かという興味深い事象がみられます。すなわち、作品には作品表現本体の力とその背景の意味という両面の受容があるとしたならば、高麗は郭熙画のもつ両面を、また部分的に形を摂取した日本はそのかたちという一面をわずかに受容し、その意味は受け取れなかったということになります。これは郭熙画のような国家と密接に結びついた作品を受容するという意味を考える、非常に興味深い例だと言えるでしょう。

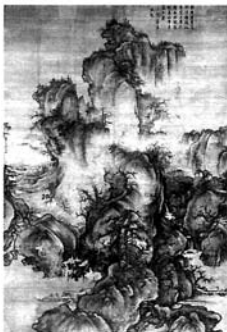
中国でのその後の郭熙は伝説的な画家として多くの影響を与えていきます。また日本では室町時代

の「君台観左右帳記」に「上 善山水寒林」として登場しますが、当時中国でもすでに稀少となっていた郭熙画を日本人が見ることは難しかったかもしれません。李在「山莊高逸図」(台北・故宮博物院)は「郭熙」偽款があり、郭熙の大観構図を受け継ぐ李在の絵が明末清初頃には郭熙画として流通していたことが知られます。また、現在では朝鮮絵画と思われる「山水行旅図」(福岡市美術館、前頁)は宝暦四年(1754)の箱書に「郭熙画」とあり、江戸時代にはこのような北方系山水が郭熙の絵とされたことを示す例です。

日本人が本物の郭熙画に出会うのは、北京の紫禁城が1925年に国立故宮博物院として改組され、その後台湾に運ばれたその豊富なコレクションが公開された戦後のことです。この過程は今後の研究の対象ですが、これら清宮に秘蔵されていた多くの名画が公開されたことは一大事件でした。続々と発刊される図録は衝撃をもって受け取られ、北宋時代に持っていた政治的な意味から解放された李郭系山水はこの後、加山又造など多くの現代作家の創作の源泉としても、新たな絵画の生命を得ていくことになるのです。(塚本磨充)

(挿図1, 4は『大観—北宋書画特展一』国立故宮博物院、2006年挿図3は伊井春樹「成尋の入宋とその生涯」1996より複製させていただきます。)

図 1



郭熙「早春図」

図 2



北宋・開封・宮闈之図

図 3



成尋

図 4



「宋神宗 半身像」

図 5



加山又造 傲北宋水墨山水(部分) 1988年